

総合患者支援センターニュース

〒700-8558
岡山市北区鹿田町2丁目5番1号
岡山大学病院
総合患者支援センター
☎086-223-7151 (代表)
☎086-235-7744 (直通)

Integrated Support Center for Patients and Self-learning
Okayama University Hospital



センターの活動に関しては
ホームページ
<http://www.cc.okayama-u.ac.jp/>

新しい年の『初心忘るべからず』

センター長 公文裕巳



皆様、新年明けましておめでとうございます。

昨年の出来事を最も反映した漢字として『新』が選ばれ、多くの方が納得されたと思います。総合患者支援センターにも新しい年の更なる飛躍に向けて、いくつかの『新』がありました。そのなかでもホームページの更『新』が最大のトピックスと言えます。特に、センター活動の日常を映す明るくて動きのあるトップページの写真に、『私たちは、患者様に最良の医療とケアを提供するために活動します』というメッセージをうまく組み込めたと自負しています。皆様にも、是非、一度、訪問頂きたいものです。

ホームページのコンテンツにありますように本センターの業務内容も年々広範かつ多岐に渡るようになり、一昨年よりは患者支援室と地域医療連携室の2室体制での運営を行っています。がん診療連携拠点病院としての業務も拡大し、がん相談を含めた医療・看護・福祉相談件数もここ数年増加の一途を辿り、その内容も複雑化しています。幸い、新しく医療ソーシャルワーカーが増員されましたので、今年は『がん相談』分野でのさらなる充実を図りたいと思っています。また、よりきめ細かな対応という視点から『がん患者サロン』を開催し、患者さんのニーズの把握に努めていきたいと思っています。

本センター活動の基本姿勢であります、『患者さんの目線での総合的な患者支援の実践』において、一般ボランティアならびに患者ボランティアの方々の活動はその中核となるものです。ホームページ内の『ボランティアの広場』でも紹介させていただきましたように、その内容は外来案内、患者図書室、病棟での活動のほかに園芸まで多岐に渡っています。今年は、懸案のボランティア・コーディネーター制の実現により、各部門での連携を図るとともに、広報活動をとおして参加者の輪も広げていきたいと思っています。

また、センター業務としての退院支援と継続看護、ならびに地域医療連携は、高齢化日本の変貌する医療、介護の体制のなかで、大学病院の役割を明確化し、地域における患者中心の継続した医療とケアを提供していくために益々重要となっています。

2010年の年頭にあたり、『温かい心と知識と技術に裏打ちされた支援の手』を表現したセンターのロゴに、あらためて『初心忘るべからず』の思いを起し、センター活動のさらなる充実と飛躍を目指していきたいと考えています。

皆様からのご意見、ご要望とともにご支援をお願い申し上げます。

病院ボランティア感謝状贈呈式



当院では、毎年、病院ボランティアの方に感謝状を贈呈して今年度は、ボランティア感謝状贈呈式と交流会を、昨年12月11日（金）に開催しました。



活動時間1000時間

太田 葉子様

このたびは、ボランティア活動1000時間に関して表彰をいただき、ありがとうございます。平成15年11月から図書室の活動を開始し、現在は月2回の園芸の活動も加わっています。どちらの活動も、私自身楽しんで活動させていただいていますが、何より患者様たちから、「図書室があって良かった。」「花がきれい。時々来て見えますよ。」など声をかけていただけるので、嬉しく思っています。今後も、どんな活動をすればより良いサービスになるか考えながら、健康に自信が持てなくなるまで、細く長く続けたいと考えていますので、よろしくお願ひします。

活動時間500時間

友重 安子様

図書ボランティアをしています。

入院、外来の患者さん、また付き添いの方達に、少しでも癒されるひとときを持っていただければ・・・とこのボランティアに参加させていただいています。このボランティア活動をすることにより、私自身も「生活の張り」をいただいています。

このボランティアでの体験を通じていろいろと学ばせていただき、活動の場をもっと広げていければと願っています。病院スタッフの皆様には、お忙しい中、感謝状の贈呈式や懇親会の場を設けていただき、有難うございました。

野崎 博子様

この度は感謝状ありがとうございました。

「図書室があってよかった」「ありがとう」という患者さんの言葉やボランティアの皆さんの前向きな姿勢に接することで、私自身が元気をもらいながら活動することができました。一輪の折り紙のバラをきっかけに、患者さんとの折り紙交流の輪も広がっています。図書室がさりげなく患者さんや家族の方々に寄り添える場であればと思っています。

土井 雅子様

この度は、感謝状をありがとうございました。

私は思わぬことで長期間お休みをし、ご迷惑をおかけしましたが、その間に、人の優しさ・温かさが身に沁みました。今も皆さまから元気を頂き、私がボランティアを受けていると感じています。

これからも患者図書室が益々充実していくよう、ささやかなお手伝いを続けていけたらと思っています。ありがとうございました。

活動時間200時間

延藤 貴志子様

この度は、年齢にめげず、勇気を出して始めた、私のボランティア活動を認めてくださって、ありがとうございました！！皆様に助けられながら、元気に無事に200時間過ごせましたこと、感謝の思いで一杯です。

活動の日は、通勤気分で、定時のバスに乗り病院へ「今日はどんな出会いがあるかな？無事に活動を終えますように！」とエプロンを掛けます。週2回、歯科と医科で、外来案内に立ちます。医科は歯科より、いろいろと複雑で、いつも動いています。程よい緊張感を保ちつつ、時間が経過します。

今後も、元気で一日でも長く活動を続けられたら良いな！と願っています。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

岩城 素子様

医大前商店街で小さな中華料理店を開いて先生方、学生さん、患者の皆様可愛がって頂いて40年。その店を閉店して何か恩返しをと始めさせて頂いたボランティア。それは大きな間違いで、反対にたくさんの人たちの輪・思いやり・すばらしい愛を感じさせて頂きました。これからも健康に気をつけて少しでも長く参加させていただきたいと思います。

西 佳代様

岡大のボランティア活動を長くさせて頂いています。

活動させていただいて、いろいろな方々と出会いました。その中で、なかなかお会いしても、お話する時間がなかったりする時もありましたが、自分なりに時間と空間を大切にかざられた中でさせて頂きました。これからもいろいろな方々とこの場所で出会えたらうれしいです。今後もみんなの笑顔を励みに他のボランティアさんとスタッフのみなさんとチームワークを大切に頑張りたいと思います。

その他、仲倉俊恵様・山本慶子様・大塚恵様に授与されました。

～こころのケア～



「期待」

副センター長 岡田 宏基

期待には、「期待する」と「期待に応える」の2つの側面があります。これらはいずれも、社会生活をしてゆくうえにおいて、大切な心の営みであります。しかし、これらが過剰になると、それが心身の不調の元になることがあります。

まず、「期待に応える」ことですが、ある人々（日本人には多いのですが）は、職場では上司の期待に応えようとして、少々無理をしても仕事を引き受け、自分の時間を削って仕事をします。親子関係では、親の期待に応えようと、自分のやりたいことを抑えて勉強に励みます。このような方々は、社会にはよく適応し、周囲の人からは「いい人」と見られます。しかし、自分の本来の欲求を抑えているため、このような状態を長く続けると、その欲求のエネルギーが行き場を失い、身体症状として現れます。これを「心身症」といい、このように過剰に周囲の期待に応えている状態を「過剰適応」といいます。

次に、「期待する」ことですが、人は身近な人には、つつい色々なことを期待します。妻が夫に、「もう少し自分の話を聞いてほしい」、「休みの日にはもっと子供の相手をしてほしい」、部下が上司に、「自分の頑張りをもっとわかってほしい」、等々。これらの期待が満たされないことが続く場合にも、心身の不調を生じることがあります。拒食症の患者さんは、元々いい子で、親の叱咤激励に従順に応えていたのですが、やせの進行とともに、親にもっと優しくしてほしい、褒めてもらいたかった、というそれまで抑圧してきた気持ちに気づくようになります。しかし、体を張ることで（やせることで）親に自分の気持ちをわかってほしいと「期待」しても、親はなかなか気づきません。どこかで期待することをやめない限り、この病気は治らないのです。他の期待も同様で、人を変えることは相当に困難なことです。種々の心身症状が治りにくい場合には、他への期待を小さくすることも必要になってきます。人に何かを期待をするのでなく、自分で自分の評価を高める、時に褒めてやることも、このような問題の解決法の一つとして考えてみてはいかがでしょうか。



